令和４年４月20日発行（毎月１回20日発行）第510号/ ISSN 0289－5161

WCRP

World Conference of Religions for Peace Japan

4
2022
April
No.510

「WCRP いのちの森」タケノコ掘り（４月２日）

こころの扉――「世界を動かす力、それは希望である（マルティン・ルター）」
大柴譲治 …… 2
第39回理事会 …… 3
平和大学講座 …… 4～5
ウクライナ情勢への対応 …… 6～7
アジア太平洋女性信仰者ネットワーク …… 8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動 …… 8

公益財団法人 世界宗教者平和会議 日本委員会

＊こころの扉＊

「世界を動かす力、それは希望である（マルティン・ルター）」

日本宗教連盟理事長
日本キリスト教連合会委員長
日本福音ルーテル教会
（JELC）総会議長
大柴譲治

この2年余、私たちはCOVID-19パンデミックとの格闘の日々を過ごしてまいりました。祈りつつ、手探りで自分にできることを懸命に行ってきたように思います。一日も早いパンデミックの収束を祈ります。また、この2月末よりはウクライナでロシアの軍事侵攻が始まり、私たちは断腸の思いで毎日を過ごしてまいりました。「原発への攻撃」「核兵器使用の可能性」「第三次世界大戦」という恐ろしい言葉まで聞こえてきます。いつまでこの状況が続くのか。一方的な暴力によって他者の自由と独立とを損なうことは何人にも許されません。

2021年8月4日の「比叡山宗教サミット34周年記念・世界平和祈りの集い」（オンライン）、10月19日の「アジア宗教者平和会議（ACRP）」（オンライン）、11月24日の「WCRP創設50周年記念式典」（対面＝於国立京都国際会館）に参加させて頂きました。これまで50年に渡ってその尊い働きに参与してこられた方々に心より敬意を表し、感謝を捧げます。ACRPでは竹村真一氏、WCRPでは人類学者の山極壽一氏と宇宙飛行士の山崎直子氏の講演からは多くを学ばせていただきました。WCRPで私は祝辞の中で「宗教家／信仰者は一千年を視野に入れて今ここを生きなければならない」という故相馬信夫主教（1916-1997。カトリック正義と平和協議会）の言葉をご紹介させて頂きました。山極氏は100万年単位での生物の進化を、山崎氏は数億光年単位での宇宙の成立についてお話しくださり、そのスケールの大きさに改めて驚かされました。同時に「今ここ」を大切にし、多様性を認め合いながら、平和を求めて生きる宗教者の使命について考えさせられています。

ウクライナ危機のさなか、私たちは今こそ祈りと希望に生きなければなりません。JELCとWCRP日本委員会は3月2日、日宗連も3月4日、その事態を憂慮し、暴力の行使に強く反対の意を表明しました。世界中で人道支援の輪は拡がっています。ACRPの祝辞でも触れたことですが、2011年3月11日の際に〝Pray for Japan〟という世界中からの祈りと支援の輪に支えられたことを感謝をもって想起します。どれほど私たちはそれによって大きく支えられてきたことか。一刻も早い殺戮の停止と和平の実現のために私たちも祈りと力を合わせてまいります。この祈りのネットワークが世界を動かす力となりますように。「世界を動かす力、それは希望である」（ルター）。〝Let us pray for Ukraine.〟

第39回理事会

第39回理事会が3月10日、メルパルク京都（京都府京都市）で開催された。新型コロナウイルス感染防止のため、オンラインを併用した。理事会には理事22人が出席し、「日本委員会人事」「WJアジェンダ2030の今後のあり方」「ウクライナ情勢」「平和首長会議とのパートナーシップ」「第24回評議員会開催について」を審議し、すべて可決された。

「WJアジェンダ2030の今後のあり方」では、各タスクフォース・常設機関の代表者による「タスクフォース／常設機関連携会議」を半年に1回程度開催することが決定した。連携会議では、アジェンダ2030の進捗を確認し、タスクフォースや常設機関の有機的な連携を図ることを目的とする。アジェンダ2030のパンフレットも作成する。

理事会の様子

また、2月24日に開始されたロシアによるウクライナへの軍事侵攻に対し、理事から所属教団の対応や、支援の取り組みについて意見交換が行われた。WCRP国際委員会は、2月28日に発出した声明の中で、紛争を逃れて避難した人々への人道支援を行うことを発表しており、WCRP日本委員会はこの呼びかけを全面的に支持し、ウクライナ情勢に対する緊急支援募金を開始することが決定した。今後は、WCRP国際委員会と連携し、宗教を通じた平和的解決を継続して模索していく。

「平和首長会議とのパートナーシップ」では、平和首長会議が策定した2025年までの新たなビジョン「持続可能な世界に向けた平和的な変革のためのビジョン」（PXビジョン）を、WCRP日本委員会としてこの理念に賛同し、支援してくことを可決した。

報告事項では、理事長業務執行報告、2022年度年間予定、事務局スタッフ・インターン募集、韓国宗教平和国際事業団（IPCR）国際セミナー、WCRP国際委員会、アジア宗教者平和会議、アフガニスタン避難家族について報告がなされた。その後、各タスクフォースや常設機関の活動についての報告があった。災害対応タスクフォースの黒住宗道責任者は、WCRP日本委員会から送金されたミャンマー人道支援募金について、ミャンマー委員会が行う国内避難民キャンプの支援活動などが報告された。

日本委員会人事で選任された役員は次の通り。（敬称略）。

活動委員（理事会で選任）

就任：佐藤裕一（日本ムスリム協会副会長）

タスクフォースメンバー（理事会で選任）

①人身取引防止タスクフォース運営委員

就任：和田恵久巳（立正佼成会総務部長）

②気候危機タスクフォース

退任：山田智恵（真言宗醍醐派別格本山品川寺総務担当）

【ウクライナの平和を願う祈り】

理事会に先立ち、ウクライナの平和を願う祈りを開催し、加盟教団の信者ら約500人がインターネットのライブ配信を視聴した。祈りでは、理事会の出席者を代表して、黒住宗道理事（黒住教教主、災害対応タスクフォース責任者）、山本俊正理事（元関西学院大学教授、和解の教育タスクフォース責任者）、中村憲一郎理事（立正佼成会参務、ストップ！核依存タスクフォース責任者）が祈りを捧げた。その後、参加者全員で黙とうをささげ、植松誠理事長が挨拶を行った。

黒住理事

中村理事

山本理事

植松理事長

平和大学講座

『宗教はコロナ後の共生社会をどう目指すか』をテーマに、平和大学講座が3月10日、オンラインで開催された。未来の地域社会の中で、人びとが互いに助け合う共生社会を構築するために、宗教者はどう行動していくことが求められるかなどについて語り合われた。

植松誠理事長（日本聖公会主教）による開会あいさつのあと、神戸国際支縁機構理事長の岩村義雄牧師が基調発題を行った。

岩村牧師はまず、『聖書』にある「人は皆、上に立つ権力に従うべきです。神によらない権力はなく、今ある権力はすべて神によって立てられたものだからです（『聖書協会共同訳』）」という言葉を紹介しながら、権力＝権威を示すギリシャ語の「エクスーシア」に対するキリスト教徒の向き合い方について語った。

岩村義雄牧師

そして、歴史上の最初の権威者（ニムロド）は、その優位性をもってヒエラルキーの源流となり、多様性ではなく統一性を実現するために言語を「一つ」にし、「包摂」を目指したと述べた。

これらのことを踏まえて、新型コロナウイルス感染症が世界中で流行したときの、各国と日本政府の対応の仕方について言及。早期にワクチン接種やロックダウン、PCR検査の徹底を積極的に実施して感染症防止に努めた国々の様子を紹介した。一方、先進諸国に比べて初期対応が遅れた日本の現状にふれ、感染者が急増して医療機関がひっ迫し、対応が後手に回ってきた現状をみて、日本のエクスーシアへの向き合い方に疑問を呈した。

これは、政府、官僚といった国家のエクスーシアによって、「だれも責任を取らない」体質、すなわち過去の政策から方向転換できないことが原因と指摘した。

このことは、単に政治だけの問題ではなく、立法・司法・行政のほかに、政治を監視する役割も持つマスコミが十分な役割を果たせていないことも要因の一つであるとした。そして、マスコミは社会の共有財産（コモン）として、大切な「モノサシ」であるべきだと強調した。

一方で、社会における市民の政治への関心度が低下していることも指摘。本来、市民生活を向上させていくべき役割のエクスーシアが、誤って使われないよう注視していくことが大事であると警鐘を鳴らした。

また、岩村牧師は、さまざまな災害で取り組んできた被災者への支援活動を紹介しながら、災害時に「自助・共助・公助」をどのように展開していくかが大きなポイントとなると訴えた。

そして、「共生」という言葉、「共に生きる」とは生物学上の「生命」だけを表すのではなく、目には見えないさまざまなつながりや働きを含む、生かされている「いのち」の存在を互いに尊重することだと語った。

そこには、仏教でいうところの「懺悔」が内在しているとし、『聖書』にあるパウロがローマの信徒へ送った「懺悔」に通じる手紙の一部を次のように紹介した。

―「私は、自分の内には、つまり私の肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意思はあっても、実際には行わないからです。私は自分の望む

善は行わず、望まない悪を行っています。自分が望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはや私ではなく、私の中に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分に、いつも悪が存在するという法則に気付きます。内なる人としては神の律法を喜んでいますが、私の五体には異なる法則があって、心の法則と戦い、私を、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのです。私はなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、誰が私を救ってくれるのでしょうか」―。

岩村牧師はこの手紙の言葉をかみしめつつ、共生社会の中では、一人ひとりが善行や愛の実践を通した「徳」を身につけていくことが大切であり、ポストコロナの時代にあって、「プロテスタント教会は『徳』の霊性を真剣に求めるべきだ」と訴えた。

また、「徳」について説いた近代日本の著名な仏教学者の鈴木大拙や、奈良時代に貧困者の救済や社会事業を指導した仏教僧の行基、「鎮守の森」に霊性を見いだした博物学者であり民族学者の南方熊楠などを紹介した。

そして、「徳」や「共生」といった価値観を有する宗教は、エクスーシアを超える存在として、「多くの人と連携を深めていくことが重要」と述べた。

パネルディスカッション

基調発題のあと、パネルディスカッションが行われた。

コーディネーターを平和研究所の竹村牧男所員（東洋大学名誉教授）、パネリストを平和研究所の金子昭所員（天理大学おやさと研究所教授）、真宗大谷派教学研究所の御手洗隆明研究員、平和研究所の安勝熙研究員が務めた。

金子所員は、「共生社会」が「分断社会」からの脱却のキーワードになるとしたうえで、①時代の流れの中のコロナ禍②宗教の直面する現実③祈りのある暮らしをつくる④宗教の基本は変わらない――について語った。

この中で、とくに宗教の「私ごと」化、つまり個人の信仰が浸透してきている現代では、「本来の神仏による救済価値だけではなく、社会貢献という付加価値が求められている」と述べた。

御手洗研究員は、災害で被災した人たちの苦しさや悲しみに向き合っていくことが、宗教者の役割であることを訴えた。

安研究員は、真心で個人に寄り添うことや地域社会の平和に貢献していくことが、あらゆる分断を乗り越えるために欠かせないと強調した。

このあと、岩村牧師を交え、コロナ後の共生社会における宗教の課題などについて、それぞれ意見を交換した。

竹村牧男所員

金子昭所員

御手洗隆明研究員

安勝熙研究員

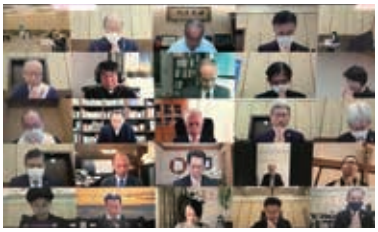
ウクライナ情勢への対応

1．WCRP日本委員会声明

ロシア軍の侵攻に始まったウクライナ危機は、多くの犠牲者を生み出し、人々に深い悲しみと苦しみを与えている。こうした情勢に対して、WCRP日本委員会は3月2日、以下の声明文を発表し、即時停戦と核兵器使用の絶対反対、そしてあらゆる関係国・機関による事態打開の要請とともにWCRP日本委員会の対話による平和的解決と被害者のための人道支援の決意を表明した。

2．祈りの結集

3月10日には「ウクライナの平和を願う祈り」を開催し、WCRP日本委員会の役員がオンライン上で集結し、犠牲者の追悼や早期の平和的解決の成就を祈った。災害対応タスクフォースの黒住宗道責任者、和解の教育タスクフォースの山本俊正責任者、ストップ！核依存タスクフォースの中村憲一郎責任者が代表としての祈



公益財団法人世界宗教者平和会議（WCRP/*RfP*）日本委員会

ウクライナ情勢に対する声明

WCRP日本委員会は、ロシアによるウクライナへの侵攻に対して深く憂慮し、強い懸念を表明します。２月24日に開始された軍事侵攻によって、これまでに多くの市民の尊い命が失われ、傷つけられています。この人道的危機によって大多数の人々が身の安全を脅かされ、住むところを追われ、さらには国境を越えて厳しい避難生活を余儀なくされています。一方で、ロシア国内ではこの軍事的攻撃に対して市民による抗議活動が行われていますが、市民の声は権力者の力によって踏みにじられ、強制的に政治の意思決定から排除されています。

紛争によって大きな犠牲を強いられるのはいつも無辜（むこ）の市民であり、脆弱な立場にある人々です。そして、武力の行使は新たな憎悪を生み、報復の連鎖を断ち切ることのできない愚かな行為であることを歴史が教えています。

さらにプーチン大統領は、核戦力の使用を念頭に核抑止力部隊を「特別警戒態勢」に引き上げることを指示し、核兵器の使用を示唆しています。現在のウクライナ情勢の影響は、周辺国はおろか全世界に及び、政治的、経済的、社会的に不測な事態を招きかねません。

とりわけ日本委員会は、1945年８月に未曽有の惨禍をもたらした原爆投下と、被ばくを体験した国の宗教者として、二度とこのような惨禍が繰り返されないことを願い、被爆者、宗教者、政府や市民などのあらゆる人々と連携し、核兵器廃絶を呼びかけてきました。この度のロシアによる軍事攻撃とそれに伴う核使用への言及は、世界を破滅の道へと導くものであり、核兵器の悲惨さを身を挺して語り続けている被爆者の核廃絶への願いを踏みにじるのみならず、平和を願う世界の多くの人々の良心を裏切る行為に他なりません。核抑止の考えは取り返しのつかない惨事を招くことを改めて想起しつつ、ここに、「核兵器使用絶対反対」を強く訴えます。

絶対非戦の精神で活動してきたWCRP日本委員会は、今回のウクライナ情勢に対し即時停戦およびいかなる暴力が止むことを訴え、対話と交渉による平和的解決に向けた関係各国・各機関のあらゆる努力を要請します。この度の危機に対し繰り返し非暴力による解決を働きかけているWCRP/*Religions for Peace*国際ネットワークとともに、いのちの平等なる尊厳性を認識し、平和とすべての人々の心の安寧が一刻も早くもたらされるよう真摯に祈りを捧げます。そして、思いを同じくする世界の人々と共に連帯し、必要とされる和平に向けた対話と人権尊重に基づく人道支援を実施します。

2022年３月２日

公益財団法人　世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会

理事長　植松　誠

【WCRP日本委員会ウクライナ緊急人道支援募金】
○勧募期間：2022年３月15日（火）～５月31日（火）
○支援事業内容：
・生活必需品、医療品等の支援物資の配布　・被災者の心的損傷に対する心理的なケア
○支援パートナー：
・WCRP国際委員会、各国WCRP国内委員会
・現地で活動するNGO、FBO（信仰をベースにする組織）、市民団体
・国連諸機関等
○勧募送金先：
※ゆうちょ銀行（金融機関コード：9900）からの振込の場合
加入者名：（公財）WCRP日本委員会　募金口
口座記号番号：００１９０－５－６３３２３８
※ゆうちょ銀行以外からの振込もございます。詳細はWCRP日本委員会ホームページをご覧ください

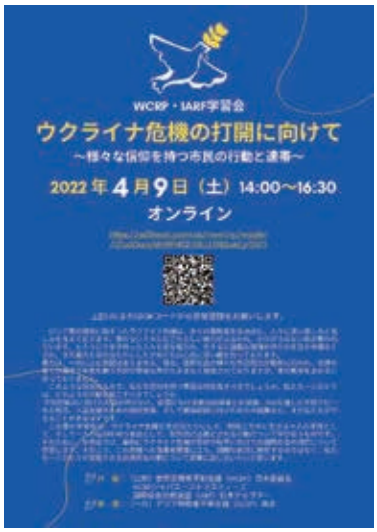
りを捧げた。

3．緊急人道支援募金

3月10日に開催された理事会において、WCRP日本委員会は、あらゆる関係者への対話の呼びかけと人道支援のための勧募金の呼びかけを行うこととなった。勧募金の呼びかけは上記の通りである。

4．ウクライナ情勢学習会の開催

この勧募金協力を含め、信仰を持つ市民一人ひとりの果たすべき役割を話し合うため、4月9日に「ウクライナ危機の打開に向けて～様々な信仰を持つ市民の行動と連帯～」と題したオンラインシンポジウムを開催する。詳細は次号。



5．WCRP／RfP国際ネットワーク

WCRP国際委員会も、暴力の即時停止と難民救済のための行動実施のための決意を示した声明を発表した。そして、WCRP欧州委員会を中心とした和平調停への模索が進められている。特に、宗教者同士のネットワークを駆使し、宗教関係者との度重なる対話を積み重ねている。あわせて、3月24日に、WCRP国際委員会役員による合同の祈りの集いが行われた。

また、アジア宗教者平和会議（ACRP）においても、3月31日に祈りの集いが行われ、イスラーム、カトリック、プロテスタント、仏教、ヒンズー教、ユダヤ教、神道など9カ国のACRP各国委員会からの即時停戦の祈りが行われた。WCRP日本委員会からは黒住宗道師（同理事・黒住教教主）が祈りを捧げた。

WCRP日本委員会は、WCRP国際ネットワークとともに、対話による平和的解決と人道支援、そして絶え間なく祈りの結集を繰り返し、事態の打開に向けた取り組みを行なっていく。

アジア太平洋女性信仰者ネットワーク

アジア太平洋女性信仰者ネットワーク（APWoFN）は、3月8日の国際女性デーを祝う集いをオンラインで開催した。『持続可能な明日を構築するための今日のジェンダー平等』をテーマに、メリー・コリモン師（東ティモール福音教会シノドス議長、WCRPインドネシア委員会運営委員）が基調講演を行った。講演では、インドネシアで女性が置かれている立場や人身取引の問題などを問題提起した。参加者は、アジアの宗教者との連帯を通じて、ジェンダー平等への取り組みを行っていくことを確認した。

3月14日には、APWoFN第1回フォーラムを開催し、21人が参加。2021年10月の第9回ACRP大会で新たに選出されたAPWoFNメンバーによる最初の会合となった。フォーラムでは河田尚子女性部会副部会長（APWoFN事務局長、アル・アマーナ代表）が司会を務め、APWoFNメンバーによる自己紹介や各国委員会の取り組みの紹介が行われた。また、今後5年間にわたってAPWoFNを強化していくための方法や本年度の活動計画について議論された。APWoFNは、2022年度に人身取引防止、平和構築、気候変動の三つのテーマの学習会の開催を予定している。

今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し新しい熟語を作ります。

歓来（ウェルカム）

シリア難民留学生日本語学校受入れの5期生が1年越しに来日しました。5年で25名。みなさん、来てくださりありがとう。ようこそ日本へ！

WCRPの活動

《4月》

2日　気候危機タスクフォース「WCRPいのちの森プロジェクト」タケノコ掘り（埼玉・所沢）　＊18日も開催

9日　青年部会CommuniHeartプロジェクト第4回プログラム（オンライン開催）

13日　ストップ！核兵器依存タスクフォース第1回会合（オンライン開催）

19日　平和研究所第1回所員会議・研究会（オンライン開催）

25日　女性部会第1回委員会（オンライン開催）

お詫び

WCRP会報3月号7頁「平和研究所第8回研究会」の記事中で、齋藤忠夫所員の名前に誤りがありました。「齋藤忠雄」とあるのは「齋藤忠夫」の誤りです。訂正してお詫びいたします。

掲載内容の無断転載を禁ず。

WCRP4月20日号　令和四年四月二十日発行（毎月一回二十日発行）　第五一〇号
発行人・植松誠
発行所・公益財団法人 世界宗教者平和会議日本委員会
〒一六六-八五三一　東京都杉並区和田二-七-一（普門メディアセンター内）
TEL:(〇三)三三八四-二三三七　HP:www.wcrp.or.jp　E-mail:rfp-info@wcrp.or.jp
頒価一〇〇円一年分一、〇〇〇円（送共）
（賛助会員の購読料については、会費に含まれている。）